
家族

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

家族

【Nコード】

N1580D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

戦争で家族を全て失ってしまった少年。しかし彼がその家族のお墓参りに行くとそこには。人情ものを書いてみました。家族の愛です。

第一章

家族

疎開しても何もなかった。正確に言つと何もかもがなくなつてしまつた。

富田修一は何もなくしてしまつた。それがわかつたのは電報の話を疎開先の叔父夫婦から聞いたからであつた。話を聞いた時はとても信じられなかつた。

「嘘や、そんなの」

大きな目をさらに見開いて叔父に対して問う。信じたくなかつた。

「皆死んだなんて」

「本当なんや」

だが叔父の修治は苦い顔でこつ言つただけだつた。小柄な身体がさらに小さく見えた。

「御前のお父さんもお母さんもな。妹達も」

「皆、死んだつて」

「本当やで」

叔父修治の横から叔母の恒子も言う。彼女はとても悲しい顔をしていた。

「あんたは一人になつたんや」

「一人……」

「ああ、一人や」

恒子だけでなく修治も言つた。

「一人だけ残つたんや。あんただけ」

「そやからな。いっちゃん」

修治が今呼んだのは修一の仇名である。彼の家は全員修一という字を男につけてきている。だから彼をそんな仇名で呼んでいるのだ。わかりやすいようにである。

「あんたは今日からうちの子や」

「叔父さんと叔母さんの子供って」

「だからな。聞くんや」

恒子も言う。

「私等夫婦にも子供はおらん。そやから」

「わし等の子供になるんや」

それをまた言われた。

「あんただけ残ったから。もうあんたしかおらんから」

「僕しかおらんて。何が」

「家を継ぐ人間や」

修治はまだ幼い修一に対してはつきりと言った。あえて言ったのだ。これは家の為でもあり修治の為でもあった。そこにあるのは複雑な事情によるものであった。

「そやから。ええな」

「それともや」

恒子はここで悲しい顔になって修一に問うた。

「うち等の子供になるのは嫌か？」

「わし等じゃあかんか？」

「そんなん言うてへんやんか」

それはきつぱりと否定した。修一はそこまで聞き分けのない子供ではなかった。

「叔父さんも叔母さんも大好きや、僕」

「そか。それはよかった」

修治はそれを聞いてまずは顔を綻ばせた。修治も恒子も非常に心根の優しい人間である。だから今の修一の言葉に顔を綻ばすことができたのである。

「そやったらええわ」

「私達は」

「けど。ホンマにおらんようになったんやな」

修一は泣きそうな顔で二人に尋ねた。もう初老と言っている二人に。

「お父さんもお母さんも昭美も実美も良美も」

「ああ、皆や」

「空襲でな」

二人はまた悲しい顔に戻って修一に言っけて聞かせた。

「この前の大阪の空襲で」

「皆おらんようになったわ」

「皆、皆かいな」

ようやく事情を心で受け止めることができた。受け止めるともう我慢できなかつた。涙が溢れ出るのをどうしようもなくなつてしまつた。

「おらんようになつたんかいな……」

「悲しいやろな。今は泣くんや」

修治はそんな甥に対して告げた。彼もまた泣きそうな顔になつていた。

「好きなだけ泣くんや、泣きたいだけ」

「あんたが一番辛いんやから」

恒子も同じだつた。今にも泣きそうだつた。

「何でおらんようになつたんや……」

「あんなに元気やつたのに」

「お父さん、お母さん」

修一はその場で立つたまま泣きだした。ただ涙に滲んだ目に家族の顔が思い浮かぶ。だがそれはもう記憶でしかない。それがわかるから余計に悲しかった。

「照美、実美、良美……」

小さい妹達ももういない。誰もいなくなつた。彼はその悲しみの前に泣くだけであつた。

それからすぐに彼は修治と恒子の夫婦の養子となつた。正式の富山家の跡継ぎにもなり彼は叔父夫婦の大きな家に住むことになつた。田舎だが大きな家であり生活には困らなかつた。彼は疎開先の小学校に通い表面上は楽しく過ごしていたのであつた。

だが叔父夫婦にはわかっていて、彼がまだ立ち直っていないことに。

「まだあかんか」

「全然やわ」

二人は夜遅くに今でそんな話をしていて、当然修一に関してのことである。修治は妻の酌を受けながら話をしていたのであった。

「一人になるといつも泣いてるわ」

「そやるな」

修治はそれを聞いて俯いた。そうして一旦酒を口に入れた。殺風景な居間であった。殺風景に見えるのは二人の心が寂しいせいなのかはわからない。だが今は殺風景な部屋になっていた。

第二章

「そうなるわ。いきなり一人になつたんやから」

「もう結構経つけれどな」

「時間の問題やあらへんわ」

修治は女房にそう告げた。暗い顔で。

「家族が皆おらんようになつたんやからな」

「そやな。ホンマに皆」

「敵もえげつないことしよるわ」

修治は忌々しげにそう述べた。

「空から爆弾落として焼き払うんや。武器持たへん人間をな」

「それがアメリカのやり方やねんな」

「そや。あいつ等はそうするんや」

実は彼はそれなりの学識がある。家が豊かだったので学校を出ているのだ。それも大学までである。そうして今は家を継いでここにいる。平たく言うと庄屋様である。広い土地の他に酒屋も持っている。修一はそうした家を継ぐように言われているのだ、

「容赦せんとな」

「鬼やで、それは」

「それが戦争やって言うたらそれでしまいやけれどな」

だが彼はそれに納得してはいなかった。

「武器を持たん相手や女子供を狙うて。嫌な話やで」

「いつちゃんみたいな子は他にも一杯おるんやろな」

「それこそ星の数みたいにおるわ」

また忌々しげに言う。飲んだ酒がまずかった。

「今の御時世な」

「そんなになんか」

「ああ、大阪行ってみい」

修治はまた女房に告げた。

「北の辺りなんか。それこそ」

「空襲のせいかな」

「戦争や」

修治は俯いて寂しげな声で言うのだった。

「仕方ないわ。けれどな」

「けれど？」

「幾ら何でも。武器を持ってへん相手に攻撃を浴びせることはあらへんやろ」

「そうやな」

恒子も同意だった。皆戦争とは武器を持つ者同士の戦いだと思っていた。しかしそうではなくなっていたのだ。それがこの時代だった。もつと言えばそれがアメリカの戦争だった。日本人はそれを知らなかった。不幸なのはそのことだったのだ。

「それでいつちゃんも」

「ここらも気をつけるんや」

修治はまた忌々しげに女房に告げた。

「ここらもか？」

「出たらしいわ、グラマンが」

「グラマンが」

「ああ」

アメリカ海軍の艦上戦闘機グラマンF6Fヘルキャットである。日本海軍の零式艦上戦闘機をその出力と耐久力で退け圧倒的な数で日本近海にまで来ていたのだ。彼等は日本上空まで来てしきりに機銃掃射を仕掛けていた。これにより多くの一般市民が命を落としていた。これもまた日本人には考えの及ばない戦争であった。

「だからや。祖と出歩く時は気をつけるんや」

「こんなとこまで来るんやな。アメリカつてのは」

「けつたくそ悪いわ。それでや」

「まだ何かあるんか？」

亭主の言葉に沈んだ顔を向ける。

「あるわ。負けたらや」
「ちよつと」

これについて言うのは禁じられていた。敗戦は言葉に出してはいけなかった。そうした世相だったのだ。言葉に対する信仰がそこにはあった。

「それを言うたら」
「二人だけやるが」

だが修治はそう言って妻を抑えた。

「だからええやる？」

「そやったらええけど」

「アメリカはな、負けた相手には容赦ない」
そう妻に告げた。

「何が何で悪党にしよるんや、相手を」

「そうなんか」

「ああ。だからこれからうんと酷いことになるで」

酒がまずくなっていた。それは決して元々まずい酒だからではない。修治が丹精込めて造った自信作だ。それがまずく感じられるのは心のせいであった。

「死んだ人も。これから死ぬ人も」

「難儀なことになんねんな、ホンマに」

「ああ。長い間な」

そんな話をしていた。修治も恒子も沈んだ心になってしまっていた。それは修一も同じで毎日行く場所が決まってしまうていた。そこはお墓だった。

一人でそこに行く。そこには彼の家族のお墓がある。毎日一人でそこに参って寂しく泣くのだ。それは誰にも言えない。だがそれでも行っていた。

修一も修治夫婦も沈んだ日々を送っていた。そうして八月になった。今度は広島と長崎に新型爆弾が落ちたとの話が伝わった。

「また。ようさんの人が亡くなったそうや」

「またかいな」

「ああ。たった一発の爆弾やったらしいけれどな」

修治は軒先で恒子、修一と一緒に西瓜を食べていた。やはりいつもは甘い西瓜もすこぶる味がしない。まるで変な胡瓜を食べている気持ちになっていた。

「それで何十万もや」

「武器を持たん人がか」

「そや。またな」

修治は辛い声で述べる。

「ようさん死んだわ」

「このままずっと死んでくんかいな」

「かもな」

修治は女房の言葉に暗く沈んだ声で応えた。夏の暑い盛りだといふのに全く暑くはならない言葉だった。まるで冬の蔵の中のようにだった。

第三章

「武器持たへんままな」

「なあおつちゃん」

ここで修一が修治に声をかけてきた。見れば彼は西瓜も食べず彼の横に座っていた。

「どうしたんや、いつちゃん」

「皆このまま死ぬんかな」

「それは」

ここに甥、いや養子がいるのを忘れていた。自分の迂闊さに齒噛みした。

「そやったらな」

「何かあるんか？」

「お墓参り行かへん？」

「こう言ってきた。」

「お父さん達のお墓に。どないやろ」

「お墓参りか」

修治はそれを聞いて表情を変えた。暗く沈んだ顔から少し考える顔になった。

「そやな」

肯定的な顔を見せてきた。

「ええかもな」

「じゃあ一緒に行く？」

「丁度お盆やしな」

それが最大の理由の一つだった。だが理由はそれだけではなかった。

「それにあんた」

それは恒子が言ってきた。

「お参りするのもええでっしゃろ」

「その通りや」

修治は西瓜を食べながら頷く。兄夫婦の墓参りもあつたのだ。

「いっちゃん、それでええか？」

「うん」

修一としては断る理由は無かつた。その言葉に頷く。

「僕はええで」

「よし。それやったら十四日や」

日まで決められた。それもすぐにだつた。

「その日でどや？」

「うちはそれでええわ」

恒子はその日によかつた。彼女は何時でもよかつたのだ。

「そうか。いっちゃんは」

「僕もや」

彼は一人で毎日行っている。それで何時がいいなどと言う筈もなかつた。彼にしては本当に自然のことではしなかつたからだ。

「その日でええわ」

「ほな決まりやな」

修一の言葉で全てが決まつた。

「行こうか。その日に」

「あいよ」

「じゃあ」

こうして全てのことが決まつた。三人は十四日にお墓参りをする事になつた。そうしてその日が来たのだった。何時になく晴れ渡つた朝だつた。

「暑いな、今日も」

「そうやね」

恒子は修治のその言葉に応えた。その後で修一を見る。

「あんたはどないや？」

「僕は別に」

修治は特に表情を見せなかつた。それに少し俯いていた。

「何もあらへんわ」

「そか。暑いのが平気やねんな」

「大阪はもつと暑かったから」

それが彼の言葉であった。

「これ位は大丈夫や」

「そうやるうな」

修治は甥のその言葉を聞いて納得したように頷くのだった。

「大阪はもつと暑いからな」

「うん」

感情の籠っていない声で頷く。

「そやから」

「平気やるうな。まあこの程度やったら」

「御飯は家帰ってからな」

恒子が二人に言ってきた。

「歩いてすぐやし」

「ああ、それでええわ」

修治はそれで不満がなかった。その証拠にすぐ頷いてきた。

「いっちゃんもそれでええやろ」

「僕も別に」

やはり感情のない返事であった。

「それでええわ」

「そやな。ほな」

「行こうか」

こうして三人でお墓参りに行くのだった。程なくして修一の家族

の墓の前に来た。

「いっちゃん、お水」

「あいよ」

家族

恒子は墓の前に着くとすぐに修一に水を運ばせにやった。墓には井戸がありそこから水を汲むのである。昔はそうした井戸が多かった。

「やあうちはお花な」

「墓石はこれで拭いてな」

修治は墓石を拭きはじめた。最初は空拭きで修一が水を汲んでくるとそれで濡らして拭いていく。それから三人で周りの草を抜いてあらためて墓石に水をかけた後でお花やお供えをして手を合わせるのであった。

「こうしてみるとすぐやな」

「ホンマやな」

恒子は旦那の言葉に頷いた。

「すぐやけれど。それでも」

「悲しいわ」

「おらんようになつたからなあ」

今度は恒子が言う。やはり修一は何も言わない。

「兄ちゃん」

修治は墓石に対して声をかけた。

「寂しいないか？ホンマに」

「いっちゃんはここにおるから」

恒子も声をかける。

「元気にやつてるからな」

「心配せんといてや」

『悪いけれどそうはいかんわ』

だがここで不意に声がした。

「！？誰や」

「御前この声は」

『わしや』

驚く恒子と修治にまた声がした。見れば修一はその声が誰のものかわかっているようであった。

第四章

「お父さん!？」

『そや』

声が笑みを含んだ。

『わしや。修一』

「うん」

修一はその声に応えるのだった。

『毎日来とつたな。知つとるで』

「わかつてたん」

『ここにずっとおつたからな』

父の声はあくまで優しくかった。まるで修一を包み込むように。

『全部知つとつたわ』

「そうやったん。ここにずっと」

『おるのはわしだけやないで』

「じゃあお母さんも」

『ああ、おる』

父の声は強い調子で彼に答えた。

『ちやんとな。おい』

『はい』

声が返って来た。それは修一も修治も恒子もよく聞いている声であつた。

「間違いないわ」

「ああ」

修治と恒子は顔を見合わせて言う。二人も間違えようのない声だったのだ。

「兄さんと義姉さんの」

「声や」

『私もずっとここにおってんで』

修一の母の声であった。その声もまた優しく修一に語り掛けるのであった。

『それでいつもあんたを見てたから』

『おつてくれたん、ここに』

『そや』

母もまた修一に答えた。

『昭美も実美も良美もな』

『三人もおるん!?!』

『おるで。ほら』

母が声をかけると。その三人の声が聞こえてきた。

『お兄ちゃん』

『いつも会いに来てくれてんねんな』

『有り難うな』

『三人共おるんやな』

修一にもそれがわかる。あらためて心に籠るものがあった。

『ちゃんと』

『そや。皆いつもおる』

父がそう修一に告げた。

『いつもな。だから寂しがることはないで』

『修治さん、恒子さん』

母は驚いたままの修治、恒子夫妻に声をかけるのだった。

『は、はい』

『何か』

『いつちゃんを頼みますね』

穏やかで何処までも優しい声を二人にかけるのだった。

『私達はもうここにいるしかできないですけど』

『頼むぞ』

父も二人に言った。心からの言葉であった。

『修治』

『兄さん』

『済まないな。御前に苦勞をかけてな』
「いや、ええよ」

だが修治はその言葉をよしとした。彼とて悪い心があるわけではないのだ。修一も好きだ。それでどうして悪いことが言えようか。

「いつちゃんは。大事に育てさせてもらうから」

『済まない』

『恒子さん』

今度は母が恒子に声をかけた。

『いつちゃんのお母さんになって下さいね』

「わかつてます」

恒子も修治と同じだった。同じ心で修一に接していたのだ。やはりそこにも偽りはない。

「絶対。いつちゃんを立派にしますんで」

『願いますね』

『おじちゃん、おばちゃん』

今度は三人の妹達の声が出た。

『お兄ちゃん御願いな』

『きつとだよ』

「ああ、安心するとき」

修治は彼女達にも優しい声で応えるのだった。

「絶対な。あんじょうするから」

「安心してそこで見といて」

恒子も。二人はこのうえなく優しい決心を今感じていたのだった。

「いつちゃんは立派になるから」

「絶対やで」

『そこまで聞いて安心したわ』

父としての安堵の声であった。

『ずっと心配やったけれどこれで』

『安心して。ここで見ていられるわ』

「ずっとここにおるん？」

修一は母の言葉にふと気付いて問うた。

「こころに。ずっと」

『そつや』

父が彼に答えた。

『御前を見とるからな』

『別れたわけちゃうで』

「そやつたんか」

『だから。安心するんや』

『ずっとな』

これで声は消えた。だが三人の心の中には何時までも残っていた。

修治は修一に声をかける。恒子も。

「なあいつちゃん」

「うん」

今度は感情のはつきりとわかる声であった。しかもそれは明るいものであった。

「わかつたな」

「わかつたわ。皆ずっとおる」

「そう。そして」

「見守ってくれてるんやな」

修治はその言葉を聞いてにこりと笑った。彼にもわかっていた。だからこそ笑えるのだった。

「その通りや。そやから」

「また来ような。三人で」

「ああ」

修治が頷く。恒子も。

「親子で」

「親子か」

「だって養子に入ったやん、僕」

修一は今始めてこのことを言ったのだった。

「そやから」

「わかった。ほな」

「親子三人でな。また」

「うん、一緒に来ような」

三人で話すのだった。三人は今始めて家族になれた。血は濃くはつながつてはいないが。それでもようやく本当の意味で家族になれたのだった。間も無く戦争が終わるがその中で出来上がったささやかな、だが大きな幸せのはじまりであった。

家族 完

2007・9・24

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1580d/>

家族

2009年3月24日09時22分発行